
 学 会 記 事

第 5 回上越胆石胆汁酸研究会

日 時 昭和62年9月5日(土)
午後3時より
会 場 東映ホテル(2階 朱鷺の間)

一 般 演 題

1) 右下側臥位径口胆嚢造影法2361例の経験

○新妻 伸二(県立がんセン
ター新潟病院)

50.8.より61.12.まで、径口胆嚢造影剤を使用し、右下側臥位、水平X線束、セオスニン筋注による胆嚢造影を2361例におこなったので、その結果を報告する。

1. 胆嚢収縮により逆流した造影剤で、左右の肝内胆管まで造影されたのが、74.3%。総胆管が造影されたのが92.2%で、径口法で胆管の診断が可能となった。

2. この体位で大腸などの障害陰影との重なりがなくなった例が54.5%、立位の時重なりが無い例と合計すると94.8%が障害陰影がなく診断が容易となった。

3. 肝内胆管、総胆管などが、径口造影剤で造影されたため、総胆管周辺の疾患の診断に有用であった例は22件であった。

4. 総胆管のスパズムをみる例があり、生理学的に興味あることであった。

2) 当教室における最近の胆石症

○福田 喜一・伊賀 芳朗
川口 英弘・吉田 奎介(新潟大学第一外科)
武藤 輝一

過去36年間に経験した1568例の胆石症例を集計した。男女比は1:1.29。症例数は増加傾向を示し、各年令別に見ると60代、70代の高年令層の増加が著明であった。結石の種類別にみると、全症例ではコ石61.1%、ピ石31.7%、黒色石6.7%、まれな胆石0.5%であり、その推移をみると、近年黒色石の増加が著明で15%を占めるに到った。そこで臨床症状の有無、胆汁中細菌培養陽性率を各結石間で検討した。黒色石は無症状例が62%と他石(コ石27%、ピ石16%)に比し多く、細菌陽性率は33%と低率であった(コ石45%、ピ石82%)。また黒色石は外観形態が多種であり、赤外線分析にてもその分類が困難な場合がある。成因、病態等不明な点が多い黒色石が近年

著明に増加し、治療上からもその解明が望まれる。

3) 当院における無石胆嚢炎症例の検討

○笹川 哲哉・峯村 正実
渡辺 雅史・堀 聡彦(立川総合病院内科)
杉田 健一・味方 正俊
渡辺 裕・大貫 啓三

昭和57年1月から昭和62年7月までに当院で経験した無石胆嚢炎は14例で、男女比は1対1、年齢は25才から86才、平均62才であった。背景因子としては他疾患での手術後、高血圧、肥満、慢性関節リウマチ、狭心症がみられたが6例では不明であった。症状は右季肋部痛、発熱が主で肝機能検査上特異な点は認めず、超音波検査では胆嚢腫大、胆嚢壁肥厚、胆嚢内泥状物の存在等を認めた。14例中緊急手術は2例、待期手術1例、死亡例1例で他の10例は保存的治療にて改善をみた。従来から本症は重篤な病態下で発症することが多く、死亡率も高いとされていたが、自験例では背景が不明の軽症例も多くみられ、超音波検査による早期診断と、保存的治療の早期開始が重要と考えられた。

4) 磁器様胆嚢3例の検討

○大隅 雅夫・正田 裕一
児島 高寛・宝田 彰
宮田 展宏・細内 康男
佐野 義明・真木 武志(群馬大学第一外科)
新井 和男・石崎 政利
正田 弘一・竹之下誠一
長町 幸雄

我々は比較的稀とされている磁器様胆嚢の3例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告した。症例は61歳、67歳、74歳の女性で、それぞれ上腹部痛、集団検診における右上腹部石灰化陰影、食欲不振を主訴に来院し、腹部単純撮影で右上腹部の石灰化陰影を認めた。3例ともに胆嚢管の閉塞、結石の充満を認めた。切除胆嚢の軟線撮影で筋層に一致した石灰化層が認められた。

我々の検索しえた本邦報告例は115例であり、年齢は22歳から82歳で男女比は1:4.8であった。胆嚢管閉塞を認める症例61例(52.6%)であり胆嚢結石は66例(55.2%)に認められた。また胆嚢癌の合併は14例12.1%で胆石保有者の約0.85%に比べて高値であった。

5) 胆嚢腫瘍性病変の2例

○朴 鐘干・山本 賢
斉藤 健吉・田代 成元(田代消化器化病院)

術前検査にて診断が困難であった胆嚢腫瘍性病変を2例経験したので報告する。症例1は39才の女性、上腹部